日本画家歌川若菜について

――1910-11 年のイギリスでの活動を中心に――

林　みちこ

はじめに

本稿は、明治期の女性日本画家歌川若菜（1889 年生まれ、晩年の消息不明）の滞英期の活動に焦点をあてた資料紹介と考察である。歌川の名の通り浮世絵師の歌川派の系譜に連なる若菜は、歌川国峰（1861-1944）のもとに生まれた。初代歌川国貞（三代豊国 1786-1864）の曾孫ということになる[1]。若菜は開学したばかりの女子美術学校（1900-）[2]に学び、卒業後に水野年方（1866-1908）に師事した。1908 年（明治 41）の第 2 回文展には《良人の室》が初入選、1910 年（明治 43）にはロンドンで開催された日英博覧会に際して渡英し、会場で日本画の実演をするなどして注目を集める。さらに現地で個展を開いたため、日本の若い女性画家という珍しさで多くの新聞に取り上げられるが、実際にイギリスで披露したであろう日本画の実作品については所在が掴めていない。閉会後は渡米してジャパン・タイムスの編集局長城谷黙（Mock Joya,1884-1963）[3]と結婚したのではないかと言われているが、その後の消息は明らかでない。

日英博覧会を研究主題のひとつとしている筆者が 1990 年代に参照していた 1910 年の雑誌記事のなかで歌川若菜の名前を見つけた際には、その足跡をたどる手がかりはほとんどなかったが、近年、世界的にデジタル・アーカイヴの整備が進み、新聞のデータ化によって全文検索が可能となったことが調査の進展に寄与した。さらに ARTISTIAN[4]という浮世絵師の事績を紹介するサイトに歌川若菜の項が作られており、参照することができた。同ウェブサイトは充実した参考文献表と、資料を読み込んだ上でまとめられた略歴など現段階で最も詳しい若菜に関する研究成果と言える。

本稿は、この ARTISTIAN サイトがまだ言及していない文献資料を追加するとともに、イギリスでの資料調査によって判明した在英期間の歌川若菜の展覧会目録や、彼女が挿絵を提供した文芸書なども取り上げ、いまだ謎の多い女性画家に関する研究の端緒を開こうとするものである。

1．歌川若菜に関する手がかり

1910 年（明治 43）にロンドン、ハマースミスのシェパーズブッシュで開催された日英博覧会（The Japan-British Exhibition）は、5 月から 10 月までの 5 カ月間で入場者約 800 万人を集めた日英二国間の博覧会である[5]。国宝を含む古美術・同時代の美術など美術作品が多数出品[6]されるとともに、場内には日本村（Fair Japan）が作られ、相撲や大道芸、大工仕事や手工芸の実演が行われた[7]。

この日本村で浮世絵の実演を行ったのが歌川若菜であるとされている。雑誌『太陽』の日英博覧会特集号では、「（日本村には）又別に浮世絵師歌川若菜子の席上揮毫あり。浮世絵は昨今ロンドンの流行物なる上に若菜子の処女姿の愛らしさ又技術の鍛錬感ずるの外なしとて軒頭人山を築けり。矢部節子、白崎園子の女子手芸も亦場内の呼び物となれり。」[8]と報じられており、好評であったことがわかる。なお、日英博覧会の美術部門に公式に出品した女性画家は日本画の上村松園と榊原（池田）蕉園の 2 名、洋画は 0、そして婦人展示の部門で武村耕靄[9]が参加している。

次の手がかりとして、在英中に撮影されたものと思われる肖像写真が大英博物館の日本部門に残っていた。（図 1）大きな樹の下のベンチの前に洋装姿で立ち微笑む女性が一人。写真の裏面には Miss Wakana Utagawa, well known painter とある。大英博物館には、日英博覧会を機に渡英して木版画のデモンストレーションで好評を博し、閉会後に帰国せず同館で東洋画の修復を手がけた漆原木虫（1888-1953）[10]も出入りしていたのだが、この写真はそれとは別の人間関係をうかがわせるものであった。写真が納められた封筒には Photographs of Japanese Painter とあり、宛先は B. Gray. Esq. Oriental Dept. British Museum, London.（バジル・グレイ Basil Gray 1904-1989, は 1946 年から 1969 年まで大英博物館の東洋部長を務めた）差出人は from Mrs Morrison とある。ここから、この写真が大英博物館の日本美術コレクションの中核を成す収集家・作家・ジャーナリスト、アーサー・モリソン（Arthur George Morrison, 1863-1945）の遺品とわかる。同封されていた写真は数枚あり、裏面に名前が記載されている。順不同で名前を挙げると Jiro Harada (London, Oct 1911), Shimomura Kwanzan (left) and friend, Kikuchi Yosai, aged 69, などがあった。原田治郎（1878-1963）[11]は少年時代に渡米して英語を学び、*The Studio* 誌などで日本美術の英文での紹介に尽力した人物である。後年は東京帝室博物館の英語解説も担当している。日本美術院の画家下村観山（1873-1930）は 1903 年（明治 36）に文部省留学生として渡英し、イギリスでも日本画制作に取り組んだ[12]。

この写真が示すように、歌川若菜はアーサー・モリソンと接点があり、1911 年に刊行されたモリソンの日本美術図録 *The Painters of Japan* の第 2 巻には「（歌川国峰の）娘の歌川若菜は、かなりの才能と将来性を持った若い女性で、昨年の博覧会の会期中にロンドンを訪れ、数か月滞在を延長し、絵を描き、展覧会を開くなどした。」[13]と紹介されている。また 1913 年のニューヨーク・タイムズの短い記事で「ウィリアム･T･ステッドとアーサー・モリソンによって天才と称えられた若い日本人女性芸術家」と形容された[14]ことからも、モリソンからその才を高く認められていたことがわかる。しかしながら大英博物館のモリソン寄贈･遺贈作品の中に若菜の作品はなく、

滞英中の日本画作品が誰の手に渡ったのかは明らかではない。

２．イギリスの新聞に取り上げられた歌川若菜

イギリスの新聞で歌川若菜を紹介したものは The British Newspaper Archive によれば 18 件が確認できた[15]。（2024 年 1 月現在）

① Thursday 18 August 1910
Birmingham Daily Post
Warwickshire, England

② Friday 26 August 1910
Sevenoaks Chronicle and Kentish Advertiser
Kent, England

③ Friday 26 August 1910
Selby Times
Yorkshire, England

④ Saturday 27 August 1910
Portadown News
Armagh, Northern Ireland

⑤ Saturday 4 March 1911
Morning Leader
London, England

⑥ Saturday 11 March 1911
Belfast Telegraph
Antrim, Northern Ireland

⑦ Saturday 18 March 1911
The Sphere
London, England

⑧ Friday 24 March 1911
Daily News (London)
London, England

⑨ Monday 27 March 1911
London and China Telegraph
London, England

⑩ Saturday 1 April 1911
The Graphic
London, England

⑪ Saturday 1 April 1911
Graphic
London, England

⑫ Saturday 8 April 1911
Illustrated London News
London, England

⑬ Saturday 8 April 1911
The Queen
London, England

⑭ Thursday 21 December 1911
The Scotsman
Midlothian, Scotland

⑮ Friday 18 May 1934
Buckinghamshire Examiner
Buckinghamshire, England

⑯ Friday 25 May 1934
Uxbridge & W. Drayton Gazette
London, England

⑰ Friday 25 May 1934
Buckinghamshire Examiner
Buckinghamshire, England

⑱ Friday 25 May 1934
Buckinghamshire Advertiser
Buckinghamshire, England

これらの記事のなかで最も詳細に歌川若菜のことを取り上げているのが⑦の *The Sphere* である。筆者は幸いにも 1911 年 3 月 18 日発行の当該頁の原紙をアメリカの古書店より入手することができた。（図 2）同紙は 245 頁の一面全体を使って A TALENTED JAPANESE ARTIST NOW IN ENGLAND. というタイトルで渡英していた若菜を特集している。中央には着物姿の歌川若菜の大きな写真、キャプションには Miss Wakana Utagawa, The artist whose pictures are now on exhibition at the Baillie Gallery とある。そのポートレイトを取り囲むように 7 点の作品図版と、日英博覧会での席画をとらえたもう一枚の若菜の写真がレイアウトされている。作品には① *A Young Woman Dreaming*, Painted when sixteen years old,　② *A Group of Japanese Women*, ③ *A Buddhist Nun*, ④ *Monkeys*, ⑤ *Composing a Poem,* ⑥ *Cock and Hen*, ⑦ *Keza Gozen* とのキャプションが付された。

テキストのほうは、20 歳になったばかりだという若菜のバックグラウンド、すなわち歌川派の系譜をたどるとともに「この流派は職人たちで構成されており、これまで日本美術を厳格に規定し束縛してきた中国絵画の伝統からも、日本絵画が妥協しようとしなかった特権的な慣習からも脱却することに成功した」と説明している。

ポートレイトのキャプション、そして本文にあるとおり、この一面の特集はロンドン、ベイリー・ギャラリーでの個展を広報するためのものであった。記事の後半には 1911 年当時のロンドンにおける同時代の日本画の受容について興味深い一節がある。「このたびの展覧会は、日本美術を愛好するイギリス人にとって、この人気ある現代の画家のオリジナルの絹本作品を熟覧する初めての機会となるのであり、特に興味深いものである。」 支持体が絹であることを把握し、版画よりも絵画の一回性に重きを置いているようでもあり、同時代の日本画を理解しようとしている様子が垣間見える。

３．ロンドン、ベイリー・ギャラリーにおける 1911 年の個展

The Sphere 紙で紹介されたベイリー・ギャラリーの展覧会について、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバートミュージアムの中にあるナショナル・アート・ライブラリーで資料調査を行ったところ、1910 年代のベイリー・ギャラリーの展覧会目録集のなかに、歌川若菜が個展を開いた際の出品リストを確認することができた。（National Art Library Historic Catalogues, 200.B.16）この個展は予想以上に規模の大きなものだったようで、40 点もの作品を展示したことが判明した。作品タイトルから類推すると、花鳥や人物、風景まで多岐にわたるモティーフが描かれていたようだ。さらに備考欄を見ると、初代豊国、広重、五渡亭豊国、春英、国貞の浮世絵も展示・販売していたとある。他の万博や国際博覧会でも人気を博した浮世絵版画は、フランス・イギリスにおいて 1909 年から 1910 年頃に再度のブーム[16]を迎えていたため、新進若手女性画家の展示と、その先祖にあたる著名な浮世絵師の作品の組み合わせはロンドンの日本美術愛好家の目を喜ばせたに違いない。一方で日英博覧会の美術展示においては桑原羊次郎コレクションの肉筆浮世絵 100 点余りが展示され、その後フランス、スウェーデン、アメリカを巡回している。[17]

目録表紙

Catalogue of Painting on Silk
by Miss WAKANA UTAGAWA
March 23rd to April 12th, 1911
The Baillie Gallery
13, Bruton Street, Bond Street, W.

出品リスト（●印は先述した *The Sphere* の図版と同タイトル）

Room III.
No. および価格（Guineas）
1. THE WATERFALL (15)
2. COCK AND CHICKENS (10)
3. THE STEPPING STONES (12)
4. EVENTIDE (12)
5. ON GUARD (6)
6. THE SPIRIT OF JAPAN (6)
7. PEONY (4)
8. THE LOVE LETTER (7)
9. REST BY THE WAY (7)
10. A JAPANESE BUDDIST NUN (25) ●
11. THE GODDESS OF CREATION (8)
12. THE KIMONO MAKER (7)
13. PIGEONS (6)
14. PHEASANT AND AZALEAS (7)
15. THE DUCK (5)
16. CHICKENS (8)
17. GATHERING FLOWERS (7)
18. PEONY (4)
19. THE LOVERS (12)
20. DUCKS (5)
21. CHILD AT PLAY (4)
22. CHILD AT PLAY (4)
23. THE GOLD FISH (5)
24. PRIVATE THEATRICALS (12)
25. MONKIES (20) ●
26. WATCHING THE BIRDS (7)
27. THE INSPIRATION OF THE POET (10)
28. MOTHER AND CHILD (12)
29. THE SNOW MAN (7)
30. RETURNING HOME (10)
31. LITTLE FRIENDS (6)
32. THE LITTLE WORKER (5)
33. WATCHING (6)
34. AN AFTERNOON PARTY (25)
35. THE LESSON (7)
36. KESA GOZEN (15) ●
37. THE MIRROR (20)
38. FRIENDS (4)
39. DRIVING THE GEESE HOME (7)
40. A JAPANESE BELLE (15)

Note—A small collection[ママ] of Japanese Colour Prints by Toyokuni I., Hiroshigi, Gotoei Toyokuni, Shunyei, and Kunisada are also on sale in the Gallery.

この目録は 1910–1911 年の各種の展覧会の目録と合本されており、同時期にどのような作家が展覧会をしていたかを知ることができるが、若菜の個展の前に H. (Henry) Franks Waring と、H. (Harry) Phelan Gibb (1870–1948) の名前があった。当時のイギリスの新聞に掲載された展覧会評も参照してみると、*The Daily News*, Friday March 24, 1911（先述の新聞リスト⑧）に Utagawa's Art Japanese Painter Foiled by Post Impressionism. という記事があり、そこでは Room Ⅰ と Ⅱ を使用していたのは Mr. H. Phelan Gibb で、典型的なポスト印象派の画風を示す 94 点の額装されたカンヴァス画およびカードボードを展示していたとあった。

周知のとおり 1910 年にはロンドンのグラフトン・ギャラリーでロジャー・フライによるポスト印象派[18]が開催され、画期を成した。1911 年の歌川若菜の個展が「ポスト印象派に染まった日本人画家」と評されたことは、時代の機運に乗った近代日本画と西欧のモダニスム絵画の親和性を窺わせるものである。

４．歌川若菜による本の装幀、挿絵―1910 年日英博覧会に出品された歴史ジオラマ、生人形との関連を発見―

歌川若菜の本画の所蔵先が明らかでなく、実見できていないことは研究の大きな課題であるが、若菜が挿絵や表紙を担当した出版物から、その画業の一端を知ることができる。

まず挙げたいのは 1911 年に出版された John Finnemore, *PEEPS AT HISTORY JAPAN*, London: Adam and Charles Black, 1911.（図 3）である。これは日本の歴史を紹介する書籍で、扉には Containing eight full-page illustrations in colour and twenty small drawings in the text by Miss Wakana Utagawa とクレジットがある。

目次に示された時代区分は次のとおりである。Early Japan/ Life among the early Japanese/ The teaching of China/ The coming of Buddhism/ The puppet emperors/ The rise of the Samurai/ The coming of Christianity/ Three great men-Nobunaga/ Three great men-Hideyoshi/ Three great men-Ieyasu/ The story of the Christian Martyrs/ The first Englishman in Japan/ The hidden Kingdom/ The opening of Japan/ Modern Japan

このうち若菜が手掛けた 8 点のカラー挿図は (1) Ainos of present day, (2)The Emperor Nintoku, (3)A court lady of the eighth century, (4)An official of the early Fujiwar（※ Fujiwara の間違い）period in state robes., (5)A warrior buddhist priest., (6)A Noble lady of the Tokugawa period (1603–1867), (7)Young Japan of today., (8) 表紙（※ 6 の図と同じもの）であった。

筆者は同書をアメリカの古書店から入手すると、挿図を一見して直ぐに日英博覧会の歴史ジオラマからのイメージの借用であることに気づいた。日英博の第 12 号館に用意された歴史展示は 12 区に分けられていた。第 1 区上古、第 2 区奈良朝時代、第 3 区平安朝時代、第 4 区平安朝時代、第 5 区藤原時代、第 6 区源平時代、第 7 区鎌倉時代、第 8 区足利時代、第 9 区桃山時代、第 10 区徳川時代、第 11 区徳川時代、第 12 区現代、と時代ごとに分けられた舞台には、等身大の人形が時代装束を身に着け、帝室博物館から借り受けた調度品とともに当時の様子を表現した。背景には二世五姓田芳柳（1864–1943）により遠近法を駆使し油彩で描かれたパネルが置かれた。前方に配置された生人形を手がけたのは明治を代表する人形師・三代安本亀八（1868–1946）であり、調度品の選定を担ったのは東京帝室博物館の故実家、関保之助（1868–1945）であった。[19] 歴史展示は日本が世界に通用する国として古代から豊かな文化を保持し歴史を重ねてきたことを、イギリスの一般市民にもわかりやすくアピールするための視覚装置として機能しており、多くの観衆を集めた。来場した若菜はこの立体的な日本史のイメージを反復させた。

では挿図と歴史ジオラマを比較してみよう。表紙と (6) A Noble lady of the Tokugawa period（図 3）は歴史ジオラマ No.11, Tokugawa Period（図 4）で桜を見上げる女性と、籠、侍女（若干、姿勢をアレンジしている）からの借用である。(3)A court lady of the eighth century（図 5）は歴史ジオラマ No.2, Nara Period（図 6）において向かって左で箜篌（くご）を奏でる女性と同じ図像である。そして (4)An official of the early Fujiwara period in state robes（図 7）において束帯姿で笏を持ち歩く官人と従者の童子は歴史ジオラマ No.3 Heian Period（図 8）からの借用であることは明らかである。

さらに言えば (1)Ainos of present day（図 9）でのアイヌの人々の様子は、日英博の会場に作られ、実際に渡英した家族が暮らしぶりを実演したアイヌ村[20]のスケッチであろう。若菜は日本政府が海外に発信しようとした近代国家としての自意識や帝国主義の拡張を、視覚言語に置き換えて描きとどめたのである。

もうひとつの作品は Frances Little の物語に寄せた挿画である。（図 10）*Mr. Bamboo and the Honorable Little God, as Told by O. Mitsu* と題して 1913 年雑誌 century magazine に掲載された童話で、*The Lady of the Decoration, The Lady and Sada San* などで知られる作家であると紹介されている。作者のフランセス・リトル（Frances Little；本名 Frances Caldwell Macaulay, 1863–1941）はアメリカ・ケンタッキー州出身の女性作家で、1901 年（明治 34）に来日、1902 年（明治 35）から 1907 年（明治 40）まで広島女学校附属幼稚園に勤め、その経験を活かして小説を書き人気作家となった。後年に「ジャポニズム小説」と呼ばれるジャンルを確立した一人でもある[21]。

図版として示した見開きのページには、座敷に 4 人の人物が描かれており、大人の女性 2 人、少女と少年、特に少年は布団に入りながら人形遊びをしている。絵画空間としては遠近法の歪みも見られるが、調度品の文様などは細かく描きこまれており、鮮やかな色彩が目をひく。挿絵につけられたテキストは “That little child reach out and find hand of foreign doll. He hold very tight, and give it look of love. Such heaven light come on his face! ” となっている。この物語は日本にまだ馴染みのなかったクリスマスを題材にしたもので、日本のミッションスクールの幼稚園に通う少年「タケちゃん」は冬の風邪をこじらせて寝込んでいるが、唯一の楽しみとして外国から届いた人形で遊んでいる、という場面がここに描かれている。作者のリトル自身の体験を織り込んだ物語と言えるだろう。

５．渡米後の動向―アメリカの新聞での紹介

The British Newspaper Archive と同じく、全文検索で新聞掲載を調べることができる利便性を兼ね備えたデータベースが、アメリカのスタンフォード大学フーヴァー研究所の「邦字新聞デジタル・コレクション―ジャパニーズ・ディアスポラ・イニシアチブ」である[22]。在米日本人、日系人の動向を知るのに欠かせないこのアーカイヴで歌川若菜の掲載を調べたところ下記の 14 件であった。（2024 年 1 月現在）

①『新世界』1907 年 5 月 21 日号、9 頁。
②『新世界』1914 年 7 月 20 日号、3 頁。
③『紐育新報』1914 年 8 月 1 日号、3 頁。
④『紐育新報』1914 年 10 月 17 日号、4 頁。
⑤『日米新聞』1915 年 12 月 17 日号、3 頁。
⑥『日布時事』1915 年 12 月 19 日号、1 頁。
⑦『羅府新報』1916 年 1 月 29 日、4 頁。
⑧『コロラド新聞』1916 年 1 月 29 日、1 頁。
⑨『紐育新報』1916 年 2 月 5 日、4 頁。
⑩『新世界』1916 年 9 月 13 日、3 頁。
⑪『新世界』1916 年 10 月 27 日、2 頁。
⑫『日布時事』1916 年 11 月 7 日、3 頁。
⑬『新世界』1917 年 10 月 30 日、3 頁。
⑭『紐育新報』1924 年 9 月 17 日、1 頁。

②では「歌川若菜女史来桑：桑港大博にも出品せん」と題し「英国美術界の泰斗モリソン氏及び『評論の評論』主筆ウィリヤムステツト氏等の知遇を得大に同国上流社会よりの喝采を博し英独仏諸国にて屢々展覧会を開きて毎回成功し広く欧州諸国に盛名を馳せたりしが今回帰朝の途次一昨夜来桑」と報じている。③には「新らしき女の歌川若菜女史は去十八日ウオールドの城谷君と同伴して来着」とある。

⑤には「歌川若菜女史の帰朝」として「昨年桑港に来り櫛引氏宅に奇遇し画筆に親み居りし所家事上の都合に依り急に明日出帆の地洋丸にて一時帰国すべしと」とあり、日英博覧会の興行を手掛けた櫛引弓人宅に投宿したことが分かる。なお⑥の「地洋丸上名士多数也」の記事によれば同船の旅客に渋沢男爵一行がいたという。

⑧には帰朝報告が掲載され、若菜の談話として欧州滞在中の詳しい行動が確認できる。「英仏露伊墺米の各国を州遊してロンドンでは約一年半の間の習作百点許りを集めて展覧会を開きましたら幸に評判がよろしうございまして『評論の評論』から挿画と意匠を頼まれましたので、純浮世絵式の風俗画を画き、次で千九百十一年の暮れに巴里に赴きました所新聞社の方が来て談話を求めたり写真を撮つたりする程で却々珍らしがられました。今春博覧会を巴里では或る素封家から六尺に九尺といふ大幅の揮毫を頼まれて文人画式のものを描き、又ある新聞社からは明治天皇御大喪当日御葬儀の絵を頼まれましたが、模様が知れぬので当惑しましたけれども、後醍醐天皇大喪の模様を参考として描き上げました。それからポーランドの貴族の某未亡人から招かれてポーランドに行き露独墺の諸国を経て伊太利へ行き米国を経て帰朝した次第です。今年の春は上野で自作の展覧会を開き、父母の許しを得ましたら台湾から、支那満州、朝鮮を経て印度エヂプトと旅行したいと思つています。」

この記事は特に検証が必要で、各国に残っているであろう作品の探索が急がれる。

華々しく帰朝した若菜に向けられた目は温かいものばかりではなかった。良い意味でも悪い意味でも目立ってしまった若い女性画家に対するバッシングが始まったのである。

⑪と⑫では同じ内容を報じているが、それは帰国しても一向に文展に出品しない若菜を批判するもので、箱根に閉じこもっている、重態らしい、などの噂話を展開している。

⑬では「歌川若菜女史 近々結婚すると噂あり 桑港に居た城谷黙氏と　絵を書かないで絵の大家　大博当時にお馴染の多い人」と題し次のように長々と中傷を繰り広げる。「仏蘭西に居つた時は何の絵を書いて誰それに誉められたの倫敦の展覧会には何等賞を取つたのと自家広告のみ盛んにして此人の絵を見たる人は滅多にあるまじ」「世界の大家が出品に苦辛せるを他所に見て一枚の絵だに書きたる事なく世人をして只怪しみの眼を以て眺めさせ居たりしが其後日本に帰つても絵は書かずに大気焔婦人雑誌や新聞の種となり居たりしがどうした風の吹き廻しやら」

最後の記事⑭からは若菜の後ろ盾が博覧会プロデューサーの櫛引弓人[23]であったことを再確認することができる。「追懐 櫛引弓人翁（下）」では「ロンドン時代以来翁は自分の娘のやうに可愛がつた歌川若菜女史の最近翁に対する態度が冷かであるとか何とか兎角面白からざる風評を友人共から翁の耳に入れると翁は達観論から説いて笑殺に附して了つたさうである。大往生を遂げたときには女史は未来の夫君たる城谷黙君（元ウオールド記者現満鉄嘱託）と共に海辺ホテル活動写真見物に出掛けた留守中であつたとか。」

これら随所に名前を見ることのできる櫛引との関わりは橋爪紳也氏が次のように指摘している。

「彼は大正十三年（1924）、金もなく妻もないままに、アメリカで出会い養女として育てた女流画家歌川若菜に看取られつつ、鎌倉長谷の自宅で息を引き取ったと伝えられている。」[24]。日英博というページェントに関わったことをきっかけとして歌川若菜の人生は大きく転換し、その舞台はイギリスからアメリカへと拡がったのである。

6. 一時帰国した日本国内での紹介

日本国内で若菜を紹介した新聞･雑誌記事については、はじめに紹介したARTISTIANサイト「歌川若菜―歌川派直系の女性日本画家―」の「参考資料」に、現在アクセスできるほとんどの日本語記事が網羅されている。年代としては1916年（大正5）1月から10月頃が多く、このころに一時帰国していた事実を補完する。本節ではこのサイトに紹介されていない資料のひとつを紹介したい。

雑誌『趣味之友』第1巻第2号（大正5年2月）[25]には歌川若菜「欧米婦人の趣味―附り、七年振りに見た日本の女」（205-206頁）が掲載されており、（図11）記事の冒頭で若菜の移動経路を知ることができる。「去る明治43年渡欧し、欧州各国に居ること約五年、帰途一年を費して北米各国を廻り、去る一月四日の春洋丸で横浜に到着。」

聞き書きの記事はイギリス、フランス、アメリカのファッションについてで、7年ぶりに戻った日本で気づいたこととして白粉が厚くなったこと、着物の柄が大きくなりすぎたことを挙げている。一般誌への寄稿とはいえ、服装や化粧の話が大半を占める記事からは、若菜の画家としての専門性よりも洋行帰りの令嬢としての属性、つまり雑誌の読者層にアピールするファッション・リーダーとしての役割が求められていることが窺える。それは若菜をジェンダーのステレオタイプに囲い込むものであった。

おわりに

以上、近年確認することのできた歌川若菜の事績を、データとともに提示した。これまで明らかになっている資料も併せての分析は今後の作業となるが、ここで紹介した資料を見るだけでも、明治末期という時代に20歳の若さで単身海外へ渡ったバイタリティ、そして欧米で名の知られた浮世絵師一族・歌川派という知名度を活用し、マスメディアを利用したセルフ・プロモーションを行った才覚を知ることができた。

明治期の日本画、つまり当時としては「現代日本画」であった同時代の絵画がイギリスでどのように受け取られたかを知る糸口を示すだけでなく、歌川若菜は、女性日本画家ゆえに集まった一時的な注目と、そのあとに訪れた忘却の時間を我々につきつけたように思われる。

近代以降の女性日本画家としては、一般にも知名度の高い上村松園、女性初の帝室技芸員となった野口小蘋、あるいは池田蕉園などが知られているが、20年ほど前から小川知子氏によって大阪画壇における女性画家の活躍（島成園、木谷千種、伊藤小坡など）を再評価する研究が深められている。さらに近年急速に研究が進展し、展覧会、研究論文で女性日本画家、たとえば柿内青葉、栗原玉葉、六人部暉峰、波多野華涯などの画業が次々に掘り起こされた。時系列で列挙すると「新章ジャパンビューティ展」（※栗原玉葉ほか）長崎県歴史博物館（2018-2019年）、「没後50年 浪華の女性画家 島成園」展、大阪市立美術館（2020年）、「女子美術大学美術館コレクション　柿内青葉展　鏑木清方門下の女性画家」女子美術大学美術館（2021年）、「特別展 日本画家 六人部暉峰の世界」展、向日市文化資料館（2021年）、「波多野華涯の世界―女性文人画家の明治・大正・昭和―」展、実践女子大学香雪記念資料館（2023年）、「決定版！女性画家たちの大阪」展（※島成園、木谷千種、生田花朝、河邊青蘭、融紅鸞など）大阪中之島美術館（2023-2024年）などである。

これらの研究の進展に学びながら、今後は若菜の日本画をできる限り多く実見することを目指し、作品の所在を解明していくことを課題として稿を閉じたい。

註

（1） 樋口弘編「浮世絵の流通・蒐集・研究・発展の歴史」『浮世絵文献目録』別冊、味燈書房、1972年、135頁、によれば三代歌川豊国の墓所は亀戸町三丁目の光明寺にあり、五渡亭国貞（即ち三大豊国）、三代の女婿の四代豊国ともう一人の女婿国久、それに豊宣、国峰までが二基の墓に収まっているという。同書は続いて以下のように記している。「そして寺の人に聞く、遺族の有様も面白い。国貞の画系を伝えた国久の方の歌川国峰老は昭和19年になくなられたが、その娘さんで画を描く若菜さんは他家に嫁せられ、たま子さんは土井家に嫁せられ、健在である。国峰老の直系の歌川うた子さんも吉祥寺にいられる。四代豊国の方では血縁に中里家がある。」

（2） 女子美術学校の創立経緯と歴史については、女子美術大学歴史資料室編『女子美術教育と日本の近代―女子美110年の人物史』日本エディタースクール出版部、2010年を参照。

（3） 城谷黙（Mock Joya）は英文ジャーナリストとしての日本および日本人観を *Things Japanese* (1960) と題して出版し、再版を重ねた。　長谷川進一「英文家 Mock Joya の思い出」『新聞研究』151、日本新聞協会、1964年2月、56-58頁。

（4） ARTISTIAN http://artistian.net/wakana_utagawa/　サイトにおける「「歌川若菜―歌川派直系の女性日本画家―」」

（5） 日英博覧会に関する研究の主なものは以下の通りである。國雄行「1910年日英博覧会について」『神奈川県立博物館研究報告人文科学』22号、1996年、65-80頁；Ayako Hotta-Lister, *The Japan-British Exhibition of 1910: Gateway to the Island Empire of the East*, London: Japan Library, 1999.; Mutsu, Hirokichi (ed.), Yonosuke Ian Mutsu (Preface), William

H. Coaldrake (Introduction), *The British Press and the Japan-British Exhibition of 1910, Facsimile edition of the original four volumes,* Melbourne Institute of Asian Languages and Societies, The University of Melbourne, 2001.; 小野文子「日英博覧会と審美書院の活動」『大学美術教育学会誌』37号、2005年、113-120頁；伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、2008年；Ian Nish, and Ayako Hotta-Lister (eds.), *Commerce and Culture at the 1910 Japan-British Exhibition: Centenary Perspectives*, Leiden/Boston: Brill, Grobal Oriental, 2012.; 楠元町子「日英博覧会と明治政府の外交戦略」『愛知淑徳大学論集 - 文学部・文学研究科篇』第38号、2013年、41-56頁；楠元町子「日英博覧会における日本の展示」『愛知淑徳大学論集 - 文学部・文学研究科篇』第39号、2014年、17-32頁；林みちこ「明治政府の対外美術戦略に関する研究―1910年日英博覧会をめぐって」（平成28年度 博士学位論文、筑波大学、2017年）など。

（6） 林みちこ「1910年日英博覧会における国宝の出品と『特別保護建造物及国宝帖』」『美術史』181冊，美術史学会、2016年、36-54頁。

（7） 林みちこ「1910年日英博覧会の両義性―「官製日本美術史」と「見世物興行」のあいだで」『藝叢』第30号、2015年、13-22頁。

（8）「日英大博覧会」『太陽』臨時増刊第16巻9号、博文館、明治43年6月15日発行、36-37頁。

（9） 田所泰「武村耕靄と明治期の女性日本画家に関する研究」『美術研究』第427号、2019年、15-78頁。

（10） 漆原木虫については研究成果が多数発表されている。太田美喜子「東西芸術の架橋―版画師漆原木虫」『浮世絵芸術』149号、2005年、38-49頁；小野文子「イギリスにおける木版技術の伝播とジャポニスムの広がり―漆原木虫を中心に」『ジャポニスム研究』30号、2010年、96-101頁；Hilary Chapman, Libby Horner, *Yoshijiro Urushibara A Japanese Printmaker in London, A Catalogue Rainonné*, Leiden : Hotei Publishing, 2017.; 板橋美也「第二次世界大戦前イギリスの木版画リバイバルにおける漆原木虫」『ジャポニスム研究』37号、2017年；山口惠里子「漆原木虫―版画におけるパストラル・リバイバル」『国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））研究成果報告書 サードフォースの美術史　1880-1920―在英日本人ネットワークの研究』2023年、5-16頁、ほか。

（11） 小前ひろみ「原田治郎研究―日本美術における異文化交流史」『大正大学大学院研究論集』46号、2022年、144-166頁。

（12） 下村観山については展覧会図録『生誕120年記念 下村観山展』（東京・小田急美術館、大阪・三越）朝日新聞社、1993年；展覧会図録『生誕140年記念 下村観山展』横浜美術館、2013年。特に渡英した下村の画業や事績については次の論文が詳細に跡付けている。八柳サエ「下村観山の滞英時代について―《ダイオゼニス》考」『横浜美術館研究紀要』第5号、2003年、53-73頁（和文）、99-116頁（英文）。

（13） Arthur Morrison, *The Painters of Japan*, vol.2, London：T.C. & E.C. Jack and Edinburgh, 1911, p72.

（14） *The New York Times*, May 12, 1913. はJAPAN'S GIRL ARTIST BEGAN PAINTING AT 6; Wakana Utagawa, Here on a Visit, Smiles at Western Imitations of Japanese Art. との見出しで「歌川若菜がヨーロッパからニューヨークに来て、ホテル・アスターに滞在している」と伝えている。

（15） The British Newspaper Archive https://www.britishnewspaperarchive.co.uk/ による。1900-1949年の utagawa wakana 掲載。（2024年1月時点）

（16） イギリスにおける日本美術展については、小野文子「近代における西洋での日本美術展―〔イギリス〕」『近代画説』26号、明治美術学会、2017年、8-25頁、および Ayako Ono, *Whistler and Artistic Exchange between Japan and the West: After Japonisme in Britain*, London/New York: Routledge, 2023.　また1910年前後の浮世絵のリバイバルブームについては南明日香「パリ装飾芸術美術館における審美書院展と桑原羊次郎コレクション展（1911年）」『相模女子大学紀要』84号、2021年、1-19頁を参照。

（17） 林みちこ「『欧米美術行脚』と国際博覧会における活躍」桑原羊次郎・相見香雨研究会編『桑原羊次郎 郷土のエンサイクロペディア』2018年、30-37頁；村角紀子「桑原羊次郎とその美術工芸研究―附『欧米美術行脚』目次翻刻」『松江市史研究』（松江市歴史叢書11）9号、2018年、45-74頁。

（18） 展覧会目録 Grafton Galleries, *Manet and the Post-Impressionists*, Nov.8th to Jan.15th, 1910-11,., London Ballantyne & Company Ltd., Tavistock St. Covent Garden.

（19） 同ジオラマに展示された生人形はその後東京帝室博物館に収蔵された。恵美千鶴子「東京国立博物館所蔵の生人形（東京帝室博物館歴史部の歴代服装人形）」『MUSEUM』東京国立博物館研究誌、第610号、2007年10月、53-77頁。近年では2023年7-8月に渋谷区立松濤美術館で開催された「私たちは何者？ボーダレス・ドールズ」展に一部が展示された。

（20） 日英博覧会のアイヌ村については、宮武公夫「黄色い仮面のオイディプス―アイヌと日英博覧会」『北海道大学文学研究科紀要』115号、2005年、21-58頁；宮武公夫「1910年日英博覧会におけるアイヌ展示―ハンマースミスとフルハム文書館および地域歴史センターにおける写真資料を中心に」『北海道開拓記念館研究紀要』37号、2009年、115-128頁；宮武公夫『海を渡ったアイヌ―先住民展示と二つの博覧会』岩波書店、2010年；小原真史『帝国の祭典　博覧会と〈人間の展示〉』水声社、2022年などで研究が進展している。2023年11月から2024年4月までロンドンのジャパン・ハウスで開催の Ainu Stories: Contemporary Lives by the Saru River でも新出資料が提示された。

（21） 羽田美也子監修・解説『メアリー・フェノロサ＆フラン

セス・リトル作品集』アメリカ女性作家の描いた日本、エディション・シナプス、2010年。

（22） スタンフォード大学フーヴァー研究所邦字新聞デジタル・コレクション https://hojishinbun.hoover.org/

（23） 日英博覧会では興行師イムレ・キラルフィーがイギリスでの博覧会実施を取り仕切り、日本村については櫛引が主導した。ロンドンにおける日本関連の興行については小山騰『ロンドン日本村を作った男―謎の興行師タナカー・ブヒクロサン 1839-94』藤原書店、2015年において検討されている。

（24） 橋爪紳也『人生は博覧会 日本ランカイ屋列伝』晶文社、2001年、60-61頁。

（25） 歌川若菜「欧米婦人の趣味―附り、七年振りに見た日本の女」『趣味之友』第1巻第2号、大正5年2月、205-206頁。

［図版典拠］

図1　大英博物館蔵

図2, 3, 5, 7, 9, 10, 11　すべて筆者蔵の新聞、雑誌、書籍から複写

図4, 6, 8　農商務省編『日英博覧会事務局事務報告』上・下巻、1912年3月23日発行より転載

［謝辞］

本研究をまとめるにあたり、調査の過程で次の方々、機関のご協力をいただきました。記して御礼申し上げます。

大英博物館 ロジーナ・バックランド氏、矢野明子氏／ナショナル・アート・ライブラリー（ヴィクトリア・アンド・アルバートミュージアム）／テート・ギャラリー附属アーカイヴ／ジョーンズ百枝氏。

［付記］

本研究はJSPS科研費21H00486基盤研究（B）「イギリスにおける近代日本画の受容と批評の実証的研究―NIHON-GAの定義へ」の助成を受けたものです。

（はやし　みちこ）

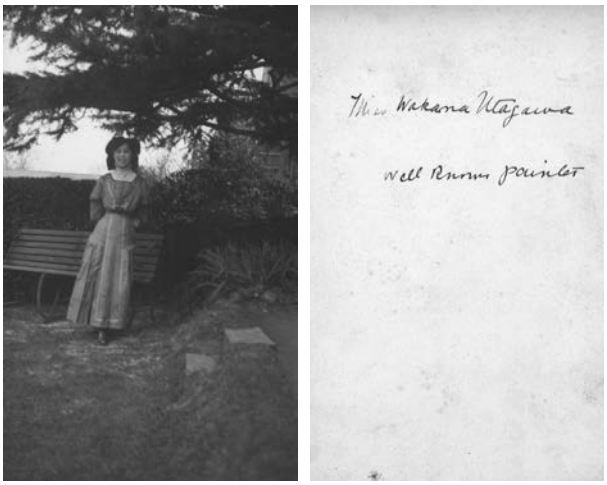

図１　歌川若菜のポートレイト
大英博物館蔵（アーサー・モリソン夫人旧蔵）

図２　The Sphere紙における歌川若菜特集頁
1911年３月18日号

図３　歌川若菜による表紙画
John Finnemore, *PEEPS AT HISTORY: JAPAN,* London, : Adam and Charles Black, 1911.

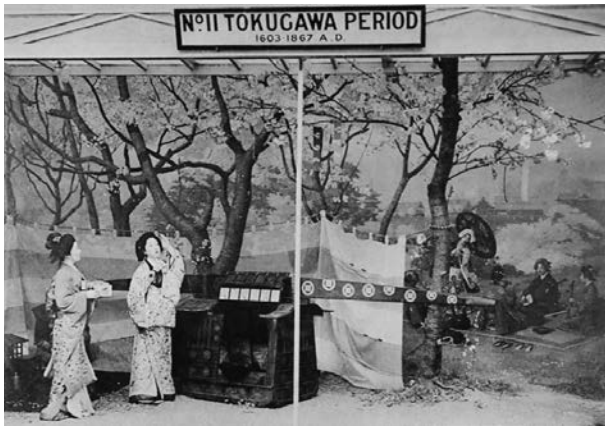

図４　日英博覧会、歴史出品【第11区】徳川時代「士民ノ行楽」1910年
ジオラマ背景画：二世五姓田芳柳、生人形：三代安本亀八、時代考証：関保之助、東京帝室博物館）

図５　歌川若菜による挿画（3）A court lady of the eighth century
John Finnemore, P*EEPS AT HISTORY: JAPAN,* London, : Adam and Charles Black, 1911.

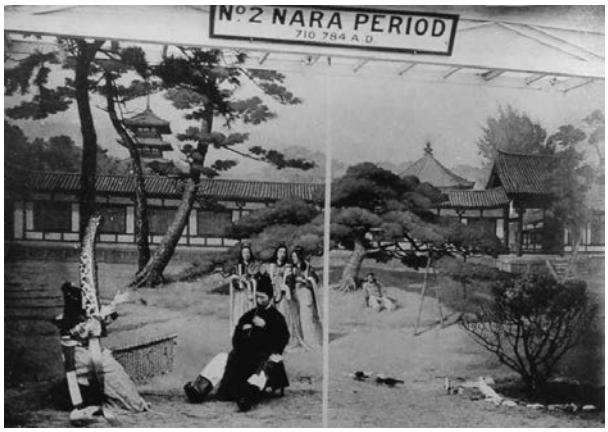

図６　日英博覧会、歴史出品【第２区】奈良時代「貴人ノ遊楽」1910年
ジオラマ背景画：二世五姓田芳柳、生人形：三代安本亀八、時代考証：関保之助、東京帝室博物館

図７　歌川若菜による挿画（4）An official of the early Fujiwara period in state robes
John Finnemore, *PEEPS AT HISTORY: JAPAN,* London,：Adam and Charles Black, 1911.

図８　日英博覧会、歴史出品【第3区】平安朝時代「朝覲」1910年
ジオラマ背景画：二世五姓田芳柳、生人形：三代安本亀八、時代考証：関保之助、東京帝室博物館

図９　歌川若菜による挿画（1）Ainos of present day
John Finnemore, *PEEPS AT HISTORY: JAPAN,*
London,: Adam and Charles Black, 1911.

歐米婦人の趣味

附り、七年振りに見た日本の女

歌川若菜

ある明治四十三年渡欧し、歐洲各國に居ること約五年、雖途一年を費して北米各國を廻り、去る一月四日の春浮丸で横濱に到着、即ち記者はまづ七年間に欧米の婦人の趣味について訊き、次に七年振りに見た今の日本の女の趣味について問ふた。

先づ英吉利の女は、十八九歳迄は、極く無邪氣で、白粉もつけず、短い裾の着物を着てゐます。それから服裝などもよく身分を知つて、家柄の高下により、又貧富の差により、其の分を守つて、決して自分より上の身分や、金持の真似をしません。佛蘭西の女は夫人でも令嬢でも、何となく小綺麗で態度その他すべて、柔かい味があり、女としても、服裝からも最も美術的と云ふ事が出來ます。獨逸は佛蘭西に比べると派手で、英國とも違つてゐます。とにかく流行の中心はどうしても巴里で、倫敦でも伯林でも、上流は其の影響を受けてゐ

趣味之友　第一卷第二號

図11　歌川若菜「欧米婦人の趣味―附り、七年振りに見た日本の女」『趣味之友』第１巻第２号、大正５年２月、205-206頁。

図10　歌川若菜による挿画
Frances Little, *Mr. Bamboo and the Honorable Little God, as Told by O. Mitsu,* 1913.